

君たちはどう生きるか

―佐藤卓己『メディア論の名著30』―

松永智子

一 スтейホームの「講義録」

歴史に残る不朽の名著も、時空を超えて読み継がれる古典さえも、それが書籍として誕生する「その時」

は時代と共にある。二・二六事件の翌年に刊行された清水幾太郎『流言蜚語』は、三・一一東日本大震災後に文庫版として復刊された。ロバート・D・パットナム『孤独なボウリング』の日本語版は、ある映画鑑賞後の、何気ない会話が引き金となつてこの世に出た。出会いの運と満ち満ちた時に促され、本は、「いま」を背負つて産み落ちる。

メディア史家・佐藤卓己が、読書人としての自らの

履歴を辿り、「自著の研究に役立ったか」という基準で選書した『メディア論の名著30』（ちくま新書、二〇二〇年）もまた、西暦二〇二〇年の世とは切り離せない作品である。

同年春、著者は「新しい領域であり、その社会貢献が期待されるメディア文化学の発展」に顕著な功績を残したことで紫綬褒章を受章、秋には還暦を迎えた。その前年、一期二年を全うした日本マス・コミュニケーション学会会長を退いたばかりであつた。本来なら、各界での講演、祝宴が続く一年であつただろう。だが、未曾有のパンデミックでその大半は中止や延期、オンライン開催に変更された。著者は、それも好機と書斎

に「巢籠もり」し、一〇年ほど前から「いつか書きたい」と思いを温めてきた本書を一気に書きあげた。機が熟した、と著者は言う。

それゆえか、本書を一読した筆者は、まるで特別記念講義に傾聴したような、分厚い書簡を受け取ったような読後感に包まれた。著者の筆先、いや、キーボードを打つ指先に込められた熱意や、スクリーンを睨む眼光に宿る想いが、種々、行間から立ちのぼる。叙述の中心は自身の来し方にあるが、その宛先は後進にある。著者が明確に意識している読者／聴衆はきつと私であり、私たちだ！と、「熱い」筆致の「クール」な新書に、主体性が動員される。参加感覚が凄い。君たちはどう生きるかと、師のため息が聴こえる。

実際に著者は、本書執筆の目的をこう説いている。

「読者が自ら創作者（著者）になるプロセス」を自らの体験として開示するためであり、それは読者身近なところでは学生や院生」との対話を成立させる

ためなのである。【30】三三五】

宣伝研究の泰斗らしく、ターゲットと戦略の設定が的確だ。本書は、「メディア史」を開拓した第一人者が、「メディア史」から出発した次世代にたむけた道標の書であり、直接会う、集まることが困難な時代に灯された、一つの遠隔「教育」メディアなのである。

私の著作の中では『ヒューマニティーズ 歴史学』(岩波書店)と並ぶ「教育的」作品である。【三四二】

ならばこの拙評は、遠隔学習の記録として師に提出する課題のようなものだろう。もちろん、本書に対する真の返答は、読者それぞれが自著を世に問い、「次世代の『メディア論の名著30』」を書いて示すことに他ならない。そうした教育の「遅延報酬」を期待し、己を律するための弁として、ここに短い読書録を記す。なお、本書からの参照・引用箇所は本文中に【アラビ

ア数字Ⅱ選書番号）漢数字Ⅱ頁数】で示した。

二 師は如何にしてメディア史家となりしや

キングの履歷書

この拙文を投稿する年報の規定では、書評する本の英文タイトルを付すことになっている。刊行されたばかりの新書題目に、定訳はまだないようだ。どう訳そう。読者の立場で内容を鑑みたとき、筆者の頭に咄嗟に浮かんだのは次の英訳だった²³ *Understanding Prof. Sato: How He Became a King of Media Studies*。

ふやけすぎだと叱られるかもしれないが、本書『名著30』の醍醐味は、選者＝著者、佐藤卓己による一連の名著『大衆宣伝の神話』（一九九二）から『現代メディア史』（一九九八）、『キングの時代』（二〇〇二）、『言論統制』（二〇〇四）、『八月十五日の神話』（二〇〇五）、『テレビ的教養』（二〇〇八）、『輿論と世論』（二〇〇八）、『天下無敵のメディア人間』（二〇一二）、『図

書』の『メディア史』（二〇一五）、『青年の主張』（二〇一七）、『ファシスト的公共性』（二〇一八）、『流言のメディア史』（二〇一九）：どれも「メディア史研究の金字塔」と評される）誕生秘話を、読書歴によって追体験できるところにある。

例えば、こんな書き出しで紹介される名著がある。

もしも本書に出会わなければ、玉音放送の八・一五終戦記念日と降伏文書の九・二降伏記念日を対置する『八月十五日の神話』（二〇〇五）も、活字の教養とテレビ的教養を対比する『テレビ的教養』（二〇〇八）も、活字的コミュニケーションの輿論と電子的コントロールの世論の融合をあとづけた『輿論と世論』（二〇〇八）も、私は書かなかったかもしれない。（強調は原文）【（24）一六四】

「本書」とは、ジョシユア・メイロウィッツ『場所

感の喪失』である。対面的相互行為論にメディア論を接合したメイロウィッツによれば、年齢別、性別、人種別、学歴別、階級別……と社会集団を分節化する活字メディアに対し、電子メディアは、情報アクセスと場所の結合＝場所感を喪失させ、人々の行動を均質化し、社会を統合する。著者の解説は明瞭で、ジョージ・モッセ『大衆の国民化』と並び、同書が「ファシスト的公共性」を問う佐藤史学に欠かせない一冊であることがわかる。

「国民化」メディア『キング』は、雑誌であり雑誌ではなかった。それは「ラジオ」であり、「トーカー」であった（↓『キング』の誕生）と論じる斬新極まる発想にも、同書の議論が活きていることは言うまでもない。惜しげもなく開陳される名著者の「内なる図書館」は刺激的で、その舞台設定もまた、類書にない画期的な形式である。

「私」のメディア史

著者は三〇冊を選書するうえで、「メディア論」とは何か、「私の基準」を次のように表明している【九】。

- 一、メディア論とは比較メディアウム論である。
- 二、メディア論とはメディア史である。
- 三、メディア論は長い射程の文明論である。

曰く、狭義な新聞論、テレビ論など個別メディアウム論ではない。純粹な理論研究、フィールド研究ではない。選挙分析など、短期的な調査研究ではない。

比較メディアウム論の枠組みで、メディア史という方法により、文明論を書く。これはそのまま、著者自身が発表してきたメディア史研究を貫く姿勢とも重なる。本書は、「私の基準」それ自体が形成されてきたプロセスを、「私の履歴書」であとつけるのだ。「いかにして歴史学徒はメディア論者となったのか」と。

著者の「内なる図書館」は、以下の章立てにしたが

い、六つの「各棚」に五冊ずつ配列されている。思わずリアルな本で再現したくなる、美しい並びだ。

- 一 大衆宣伝Ⅱマス・コミュニケーションの研究
- 二 大衆社会と教養主義
- 三 情報統制とシンボル操作
- 四 メディア・イベントと記憶／忘卻
- 五 公共空間と輿論／世論
- 六 情報社会とデジタル化

このスマートな編成は選書の整理群でありながら、著者自らが手がけてきた仕事を一望するための見取り図でもあり、佐藤史学としてのメディア史の射程とも読める。「宣伝」「公共性」「国民化」を分析軸とする「感性のメディア史」の背後には、いかなる精神世界が広がっているのかを、読者は具体的に知ることになる。後に「世論の輿論化」を主張する著者の知的土壌ともなったドムナック（1）や、「仮想敵」としてのハーバ

ーマス（22）、「精神的血縁」を感じるほど甚大な影響を受けたモッセ（5）。処女作で問うた感性のメディア史に「ベンヤミンの視角」（16）が鏤められていると悟ったのは、書評者の指摘からであったという。偶然を必然のものとして書く歴史学者の筆が立ち、各書物との出会いと交わりが、まるで恋愛の如く率直に開示されている。

縁と独学

京大西洋史、ドイツ新聞学、東大新聞研（現・情報学環）、同志社新聞学、日文研、京大教育学へと拠点を移してきた「アラ還」著者の個人史は、学界史やメディア史として読んでも面白い。著者と書物との関係には、場所や人との縁が曰く言い難く結びついている。手渡された本、探し求めた本、誰かと読んだ本、訳した本、訳者を知る本、誕生に深くかわった本。著者のゼミに所属していた筆者が直接耳にしたりその場に居合わせたりしたエピソードもあれば、本書で初めて

知る「歴史」も少なくなかった。書物をめぐる著者のソーシャル・キャピタルが、フローな語りではなく「講義録」としてストックされる意義も大きいだろう。

書物を通じた「他者」との対話で、著者はメディア史家としてのアイデンティティを確立していく。「我々の規範を語るジャーナリズム論と、「私」なき分析に徹する客観的マス・コミュニケーション論とを止揚し、「私」の位置拘束性（ポジショナリティ）が問われる批判的歴史学としてのメディア史こそがメディア論だ」という提唱である。本書を読めば、そのような「私」の独立には、各所での縁に加え、独学というスタイルが重要であったことに気づかされる。東大新聞研を去り、同志社大学新聞学科へ着任した春、著者が「天啓のように読んだ」というイニス『メディアの文明史』について、次のような記述がある。

当時の私は、歴史学から出て、社会科学の領域に自分のメディア史を位置付けようと考えていた。とは

いえ、アメリカ流の社会心理学的研究（↓4）も、ましてマクルーハン流の感覚的メディア論（↓29）もあまり役立つようには思えなかった。そんなとき「歴史を科学の実験室として用いる」イニスに立ち戻ったのである。【（6）七〇】

誰かの背後を追うのでも、どこかのグループに属するでもない。独りで道を拓くため、本を探し、読んだ。

その出発点として、卒論執筆談が挟まれている。著者は、西洋史学徒として卒業論文に取り組んでいた際に最も困ったのは、資料として使用する新聞や雑誌の研究方法が皆目わからなかったことだと回想する。当時の京都大学に、メディア研究の講座も教員も存在しなかった。図書館で「ジャーナリズム」「マス・コミュニケーション」の関連教科書を渉猟するうち見つけたのが、小山栄三『新聞学原理』（3）だった。それは修士論文研究への道標となり、博士論文構想の起点ともなったという。

三 クールな教科書か、ホットな啓蒙書か

ジャーナリズムやメディアの研究者もいない京都大学だったから、私は「自分で考えること（ゼルプストデンケン）」（いわゆる京都学派のモットー）を実

践できた。もし学生時代に誰かマスコミ研究者に直接教えを求めていたとすれば、地下書庫に眠る本書と出会うことはなかっただろう。【(3) 三七三八】

あとがき【三四〇】にも記されているように、放任主義の京大に学び、京大で教える著者の理念がここに強く表れている。また、それとなく主張しているようにも読める。自分で考える学習実践と、細かい指導より自らの研究する姿を晒すことを重視する教育実践は何も京大に限らず、新しい学問領域である「メディア史」との親和性も高いのではなからうか、と。

消費財としての教科書？

メディア論を専攻する学部生、といった初学者に、本書はどう読まれるのだろうか。著者は、エンツェルスベルガーが『意識産業』（2）で看破した「消費財としての教養」に倣い、毒か薬か、こう呟く。

私もこの『メディア論の名著30』がどう読まれるかは理解している。それゆえ、次のように書いたとしても問題はあるまい。大衆化した大学で本当に勉強する学生はごくわずかかもしれない。しかし、大量の学生の存在が「少数の真の学生」に迂回的な奨学金を与えている。それは果たして悪いことなのかどうか。【(2) 三五】

その言の通り、本書は「大量の学生」を意識したタイトルと形式を取りつつ、その内容は「少数の真の学生」

に向けられている。本書を面白く読むためにはそれなりの読書歴が必要であり、丸腰で臨み、要点だけ「快適」に学べる入門書では必ずしもないと筆者は思う。

逆にいえば、自ら主体的に学ぶ「少数の真の学生」には最良の教科書である。選書された本を実際に読む際のブックガイドとしては勿論、先に触れた「消費財としての教養」(2)や「システム社会」(12)などは、『現代メディア史』の解説、副読本として重宝する。

著者の作品に触れ、なんらかの問題意識をもった読者にとって本書は良き地図となり、水先人となるだろう。

他のちくま新書『〇〇学の名著』シリーズにはない本書の特色として、取り上げる書物同士の参照関係がインデックス(↓〇)で示されている。頁を行きつ戻りつつして読ませるこの形式は、それぞれの知識を文脈の中で理解するよう促す。キットラーによるマクルーハン批判(27)やハーバーマスのメイロウィッツ批判(22)、メイロウィッツ(24)の博論審査員の一人がポストマン(10)であり、『場所感の喪失』(24)の

一部は『幻影の時代』(18)に刺激を受けたものであること。ダヤーン & カッツ『メディア・イベント』(19)に影響を与えたのはブーアステイン(18)よりモッセ(5)だったことなど情報量が豊富で、学説史解説としても優れている。各人の思想的背景となる経歴紹介に加え、リップマン『世論』(21)のように、選書本巻末にある訳者解説への批判的解説も読み応えがある。

『火星からの侵入』(12)は、初学者というよりメディア論を講じる教師にとって必須であろう。長い間、マス・コミュニケーション論やメディア論の教科書で弾丸効果パラダイムの代表的著作として紹介されてきた(いまも紹介され続けていると思われる)同書について、近年の研究を踏まえ、その「神話」を解体している。「神話」がなぜ語り継がれたのか、自身も含めた研究者の知的怠慢を戒めつつ、それはなぜ信じ続けられたのか、知識社会学的な考察を試みる。自著『現代メディア史』における「火星人の襲来」解説の旧版(一九九八年初版)と新版(二〇一八年)との比較は、知

見が更新されていく具体例として興味深い。

しかしここで立ち止まるべきは、著者が『流言のメディア史』(二〇一九年)執筆過程で「神話」を疑ったという点であろう(二)。古典への批判的考察は、「読む」より「書く」動作によつて駆動するのだという教育的な事例だからである。「少数の真の学生」、つまり書く人に当てられた本書の焦点は、最後まで全くぶれない。

書く技法

本ブックガイドを読めば、書きたい、書かなければと駆り立てられる。正確にいうと、書くために読みたいと思わされる。これは著者の戦略である。

読者は随所で、選書した書物をめぐり「読んでいなかった」「初めて読んだ」「必ずしも読む必要はない」といった著者の堂々たる告白や判断に接し驚くだろう。ブックガイド、なのに?! 大御所ゆえの余裕も勿論あるだろうが、「読まない」ことをあえて強調する著者の真意は、三〇番目の選書、バイヤール『読んでいない本

について堂々と語る方法』『教養主義のメディア論』で明かされる。

著者によれば、同書は、書物の内容より形式、真偽よりも効果を論じた良質なメディア論である(三)。「神聖な読書」「通読」「正確な再現」といった読書の厳格主義を有害だと退けるバイヤールに沿つて、読者が自ら創作者(著者)になるプロセスに開かれていることを、「教育的に正しい」読書の条件にあげる。著者による次の引用が核心をついている。

「読書のパラドックスは、自分自身に至るためには書物を経由しなければならないが、書物はあくまで通過点でなければならないという点にある。良い読者が実践するのは、さまざまな書物を横断することなのである。良い読者は、書物の各々が自分自身の一部を抱えもっており、もし書物そのものに足を止めてしまわない賢明さをもち合わせていれば、その

自分自身に道を開いてくれるということを知っているのだ。」（強調は原文）【(30) 三三四】

ここで読者は悟るであろう。なるほど本書は、「書物そのものに足を止めてしまわない賢明さ」が「自分自身に道を開いて」くれた壮大な実践例なのであると。リップマン（21）に戻ろう。著者は、通常なら情報の「読み」に力点が置かれる「ステレオタイプ」について、定説を疑って「書く」研究者のメディア・リテラシーとして解説している。自著『輿論と世論』（二〇〇八年）のブレイクスルーが例に挙げられ、説得的だ。さらに著者は、「いつ、何を、どのようにして読むか」についての具体的なティップスも書き込んでいる。

私は不要不急の大著の多くを教育指導にかこつけて学生と一緒に読破した。【(27) 三〇一】

さらりと書かれた一文だが、陰に陽に示されている

のは、書く道を選んだ人間は常に急を要する「書くための書物」を抱えているはずで、のんびり読書を楽しんでいる余裕などないということだろう。全ての読書が自身の研究とつながる態度で臨め、という著者の箴言を読み取ってしまう。本書の明示的な「隠れたカリキュラム」は佐藤卓己流書く技法であり、この本は書くメディア論学徒のための啓蒙書ともなるだろう。

ちなみに筆者は、本書でも言及のある二〇〇九年の佐藤ゼミ「メディア論の名著三〇冊を読む」に一学生として参加していた。今となっては、かげがえのない財産である。思い返すと、毎週一冊ずつ大著に挑むのは勿論、課題本を入手するのも容易ではなかった。メンバーと情報交換しながら、自転車でいくつもの古本屋を探し回ったことが懐かしい。今でも古本市などで状態の良い名著を見つけると、たとえ不要不急でも購入してしまう。誰かに渡せる、と思うからだ。

「読まなくても良い。読むべき本は買っておきなさい」【(30) 三三八】。先生のおかげで、現在私の手元

には、あの頃みんなと「読んだ」本がモノとして残っている。ところどころ挫折したのだろう、読んだ痕跡のない綺麗な頁に、報告者のレジュメや、その当時観た映画の半券などが挟み込まれていた。この原稿に取り組むため、思わずそれらを読み返したくなったが、書物そのものに足を止めてしまいそうで禁欲した。あるレジュメ（二〇〇九年四月二七日付）の余白に、先生の言葉を筆記したと思われる手書きのメモが残っていた。

報告する本は、自分の論文に使えそうなものから選ぶこと。報告する際は、自分の論文で引用できそうな箇所を中心にレジュメにまとめること。

先生の教えは変わらない。「佐藤ゼミ」が書店で買える（税込二一〇〇円）ようになったことを、改めて寿ぎたい。

四 「メディア史」第二世代はどう生きるか

これまで見てきたように、本書では「読み・書き能力」の後者に力点が置かれ、そのメッセージは通奏低音として全体に響き渡る。書け、という訓示は、研究者として当然の倫理や、いわゆる業績の生産性のみを意図したものではもちろん、ない。著者が最大の注意と関心を払っているのは、「メディア史」という新しい学問領域が、今後、第二世代にどう引き継がれるかにあると、筆者には思われる。佐藤メディア史学の汎用性を確認するためにも、それが発展的に批判されるためにも、メディア史というメディア論は、読まれるのではなく、積極的に書かれなければならない。

著者は、近年のメディア史研究における「考古学ブーム」に触れ、「抑圧され、無視され、忘れさられたメディア」の可能性の文脈を理解し、メディアの未来を

現在とはちがった発想で展望する視座を獲得できるとするフータモのメディア考古学の思考法は、マルクス主義的發展段階論が失効して以降、既に各ジャンルで模索されてきたものと指摘する^{三〇}。そこに著者がコミットしなかったのは、全体状況を見渡した上での、自身のポジショナリティにあった。

私をふくめたメディア史の第一世代は、まずメディアの俗説を改め、「正史」に近づく必要にせまられていた。メディア史というジャンルがまだ確定されていなかったためである。考古学であるより現代史の立ち位置を優先することになった。【(26) 一八七】

「正史」を書いてきた仕事への自負とも読めるし、次世代のポジショナリティを占っているようにも読める。第二世代はどう生きるのかと。一つ、逸話を挟みたい。筆者の学位論文の口頭試問の終盤、メディア論的考察の可能性について、審査員の先生方と議論にな

った^{四〇}。極度の緊張もあり、対話の詳細は記憶から遠のいてしまったが、本書の著者であり筆者の主査であった佐藤卓己先生が最後に呟いたコメントだけは、明確に再現できる。

ジャーナリズム論やマス・コミュニケーション論を乗り越えることが最重要課題だった私の世代は「メディア」にこだわってきたけど、あなたたちは、案外「ジャーナリズム」や「コミュニケーション」で斬った方が、面白い仕事ができるかもね。

先生からすれば些細な一言だったかもしれないが、私には強く印象に残っている。奇しくも、筆者はその後「コミュニケーション」学部に奉職し、「ジャーナリズム」論を担当することになった。学生時代、直接誰かに教わったことない「フィールドワーク」を教えてもいる。周囲でカルチュラル・スタディーズも元気だ^{五〇}。これ幸い、自分の領域を広げるチャンスと取り

組んできたが、現時点で「面白い仕事」には全く結実していない。本書を読み、自分自身が師から受けてきた影響の大きさに愕然とするとともに、師から自立する唯一の方法もまた、書いていくことでしかないと思わされた。著者の狙い通り、本書は極めて「教育的」な作品である。

さて、甚だ身勝手な、喝入り報告の書評になってしまった。カトリックとメディア論、エリート主義と輿論研究など、本書の内容について具体的に聞いてみたいこともあるが、別の機会にしたい。自著の執筆に加え、目下、佐藤先生退官記念論集の構想も始まっている^⑤。師の問いかけに対する、第二世代の応答になればと、意気込む。そして空回り、転びそうになったとき、本書は経典のごとく、私や私たちを正し、導いてくれるだろう。

② 同書の元となった『考える人』（新潮社）の連載「メディア流言の時代」（全八回）は二〇一三年冬から二〇一五年秋。

③ バイヤール流読書の有効性は、ドゥルーズとガタリの哲学とラカン派の精神分析学を背景として書かれた千葉雅也『勉強の哲学』文春文庫（二〇二〇年）でも紹介されている。

④ エルキ・フータモ著・太田純貴編訳『メディア考古学：過去・現在・未来の対話のために』NTT出版（原著二〇一二年、二〇一五年）

⑤ 二〇一四年一月、京都大学教育学部研究科第 ⑥ 議室

⑥ 光岡寿郎・大久保遼編『スクリーン・スタディーズ』東京大学出版会（二〇一九年の編集者の一人は研究室の隣人で、日々刺激を受けている。⑦ こう活字にして「予言の自「成就」を狙う佐藤早「流書」技法に倣う。